

國府田 武著

ベギン運動とブラバントの靈性

創文社刊



ベギン運動とブラバントの靈性

國府田 武 著



創文社

國府田 武 (こうだ・たけし)

1941年生まれ。上智大学大学院西洋文化研究科修士課程修了，ルーヴラン大学留学，ノートルダム清心女子大学助教授をへて，現在，東海大学文学部教授，博士(史学)。

〔主な業績〕(論文)「エラスムスと三言語学寮の設立」(橋口倫介編『西洋中世のキリスト教と社会』刀水書房，1983，「バスカルとカルメル会の靈性」(『東海大学紀要文学部』第58輯，1993)，(共著)上智大学中世思想研究所編『中世の修道制』(創文社，1991)，同編『聖ベネディクトゥスと修道院文化』(創文社，1998)，(翻訳)F.ブリュシュ他『フランス革命史』(白水社，1992)，赤木昭三他編『バスカル全集』第1・2巻，(白水社，1993-94，共訳)，L. コニエ『キリスト教神秘思想史 3 近代の靈性』(平凡社，1998，共訳)，他。

〔ベギン運動とブラバントの靈性〕

著者との申し合せにより検印省略

暁印刷・鈴木製本

発行所 株式会社 創文社 〒100-0043 東京都千代田区麹町二一六七一 電話 〇三三二六三七一〇一 振替 〇〇二二〇〇九二四七一		二〇〇一年一月二〇日 第一刷印刷	
		著者	國府田 武
印刷者 安達精治		発行者	久保井浩俊

ISBN4-423-46050-5

Printed in Japan

凡 例

- 一 本文中の欧文著書名のうち、註に記してあるものは原綴りを省略した。
- 一 聖書の引用文は、各種の邦訳聖書を参照しながら訳し、表記法は『新共同訳聖書』に準拠した。
- 一 邦語の著作と翻訳からの引用文中の語彙や表記を、全体の統一のために、断りなく改変した場合がある。
- 一 欧文定期刊行物、叢書、辞典の略号は、巻末の文献目録の冒頭に示し、サン・ティエリのギョームとハデウエイヒ、ルースブルークの著書の略号はそれぞれの部ないし章の註の冒頭に記した。

目次

凡例.....v

序言.....三

第Ⅰ部 サン＝テイエリのギョームの靈性

第一章 サン＝テイエリのギョームとその時代.....一三

一 ベルナールとの出会い.....一四

二 修道院の改革.....二四

三 方法をめぐる異議申し立て.....三〇

第二章 サン＝テイエリのギョームの靈性.....四〇

一 愛と理性.....四〇

二 経験の学問.....五三

目次

三	オリゲネスの発見	三
四	人と神の出会い——靈的一致	六
五	愛による知	八

第II部 ベギン運動とその靈性

第一章	ブラバントのベギン運動	七
-----	-------------	---

一	研究史と初期のベギン運動	七
---	--------------	---

二	ベギンの語源	二二
---	--------	----

第二章	ワニーのマリと初期のベギン	二三
-----	---------------	----

一	『ワニーのマリ伝』とカタリ派	二三
---	----------------	----

二	キリストの人性の信心	二四
---	------------	----

三	ベギンと教会	二五
---	--------	----

第三章	ハデウェイヒの靈性	二六
-----	-----------	----

一	生涯	二六
---	----	----

二	作品	二七
---	----	----

三	ハデウエイヒの靈性	一八六
---	-----------	-----

第Ⅲ部 ルースブルークの靈性

第一章	ルースブルークの生涯と作品	二五
-----	---------------	----

一	伝記史料	二五
---	------	----

二	ブリュッセル時代	二八
---	----------	----

三	グルーネンダール時代	三三
---	------------	----

四	ジェルソンの批判	三六
---	----------	----

第二章	靈性の系譜——サン・ティエリのギョーム・ハデウエイヒ・ルースブルーク	三〇
-----	------------------------------------	----

一	ルースブルークとサン・ティエリのギョーム	三〇
---	----------------------	----

二	ルースブルークとベギン	三七
---	-------------	----

結 論		四〇
-----	--	----

あとがき		三二
------	--	----

目 次		57
-----	--	----

文献目錄	26
略号表	24
索引	6
欧文目次	2

ベギン運動とブラバントの靈性

序 言

本書はいわばフランドルの三^{トリブティック}連祭壇画のように構成されている。中央パネルは第II部の「ベギン運動とその靈性」であり、左翼は第I部の「サン・ティエリのギヨームの靈性」、右翼は第III部の「ルースブルークの靈性」である。中世「南ネーデルラント（今日のベルギー）」のブラバント地方の靈性は、一二世紀のギヨームを源泉とし、一三世紀のベギン運動の神の経験を経て、一四世紀のヤン・ヴァン・ルースブルークに開花を見る。この靈性の系譜をたどり、その特質を素描し、周縁的な女性一般信徒であるベギンの宗教的経験がブラバントの靈性の形成にはたした役割を明らかにしたい。

中世の南ネーデルラントの重要性は、それが西方キリスト教世界の中で、南の地中海の文明と北の文明とを結ぶいわば中枢神経系の一方の端に位置していたことにある。イタリアからアルプスを越えて、ライン軸を北上して南ネーデルラントから北海に出るかつてのロタリンギアは、西ヨーロッパの脊柱に相当する地帯である。ベルギーのフランドルから北海をへてイギリスまでを含めると、このベルトは一千キロメートルを越える南北両文明のコミュニケーションの重要な経路である。西ヨーロッパのこの地帯はまた、最も人口が稠密で、最も都市化が進み、人が移動し、物が交換され、情報が伝わるきわめて活動的な空間でもある。この空間の中にあるブラバントは、ライン地方とフランドルを結ぶ中間点に位置する要衝であった。

ヨーロッパでは、造船と航海の技術が発達してしだいに遠くまで行けるようになるのと呼応するかのよう、内的な世界の冒険の旅も始まる。人間は大きな神秘であり、外的世界と同じように内的世界も人を探検にいざなう。船が不思議の国を求めて進むように、神との出会いを試みる魂の旅も、神秘的な神の国を目指すのである。中世の南ネーデルラントでも魂は神との個人的な冒険の旅に出る。

この研究は、「靈性」という概念を用いて、中世ブラバントにおけるキリスト教の宗教生活、とくにこのような神との出会いについて知ろうとする「靈性史」の試みである。「靈性」という言葉は、日本語としてまだ定着してはなく、その意味についても必ずしも合意が成り立っているわけではない。キリスト教の「靈性」は、パウロの手紙にみられるギリシア語“pneumatikos”の教会ラテン語訳“spiritalis”ないし“spiritualis”という形容詞から派生した名詞“spiritualitas”の訳語である。この言葉の意味は、時代による変遷をへて、一七世紀末頃には内的・個人的な宗教生活と完徳の探求を意味するようになり、一九世紀末から二〇世紀初頭以来、靈的経験を批判的・客観的に研究する学問をもさすようになる。

今日では外的・身体的であったり、社会的・集合的な経験をもそれに含める傾向にあり、エコロジ⁽¹⁾と靈性、フエミニズムと靈性、解放の靈性などと題する研究も見られる。またサン・ティエリのギヨームをはじめ、ハデウエイヒとルースブルークはしばしば「神秘家」と呼ばれ、彼らの記述した神との出会いは「神秘的」と形容される。

普通の者が期待できないものを、この世で見たり味わったりする無償で特別な計らいを、彼らが享受するからである。⁽²⁾しかし欧米では、とくに第二ヴァティカン公会議（一九六二—一九六五）以降「すべての人が聖性へと召し出されている」ことが強調され、日常的な普通の状態と神秘的な特別の状態の区別は薄れてきて、「靈性」を宗教的体験の全体を包摂する概念として、日々の信仰も神秘的な状態も連続的に捉える方向に向かっている。⁽³⁾

魂の愛の冒険を描いたベルギー中世の三人の靈性家は、明示的に「靈性」という言葉を使っているが、彼らにとって「靈性」が最も大切であり、すべてはそれに由来する。本書では「靈性」は、宗教的經驗の領域を対象とし、とくに神との出会い、神の經驗、神との親密な関係をさす言葉として用いられている。「靈性」は神学と深い関係にあるが、同時に神学と区別される領域でもあり、近年神学の専門用語をなるべく用いないでそれを定義しようと試みられている。その方向に沿って、本書に登場する靈性家としての「靈性」を定義するならば、「魂と神との愛の営み」であり、彼らが強調する靈的體驗における魂の受動性を考慮するならば、むしろ、「靈性」とは「魂の中における神の愛の営み」というべきであらう。⁽³⁾

また元来キリスト教には、福音にもとづいたただ一つの「靈性」しかないという見解もあるが、さまざまな方法でそれを生きることが可能なので、プラバントの靈性やフランシスコ会の靈性について語ることもできるのである。⁽⁴⁾そして「靈性」を客観的・批判的な研究の対象とする靈性史の大きな問題は、この目に見えない領域をいかに記述するかということにある。そこで本書では、靈性史がなるべく多くの人に理解されることを願って、できるかぎり平明に記述することに努めた。

第I部のテーマであるサン・ティエリのギヨーム（二〇七五／八〇頃—一一四八頃）の発見は、二〇世紀の中世研究の大きな成果の一つであった。彼は三〇年近くにもわたりクレルヴォーのベルナルの友人であった。二人は知的・靈的な次元でも互いに敬意を払い、ギヨームはベルナルの生前にその伝記を執筆していた。しかし二人の死後しばらくたった一一六五年頃から、多くの写本がギヨームの著作をベルナルに帰するようになり、結局、中世においてはギヨームの著作のいくつかはベルナルの作品とみなされて多くの人に読まれていた。たとえば、ギ

ヨームの初期の作品である『愛の本性と尊厳について』と『神の観想について』は、それぞれ『愛についての聖ベルナルの書』と『聖ベルナルの独語録』として流布し、『黄金書簡』と呼ばれた晩年の作品『モン・ディユの修道者への書簡』も、ベルナルの手になる作品とみなされて、多くの修道者に修道生活の手引きとして読み継がれていた。一方、このように成功を収めた三つの作品以外のギョームの神学的論文と註解は忘れ去られていった。ベルナルの權威に守られて彼の著作が後世に伝えられたのは、われわれにとっては僥倖と言わなければならない。このクレルヴォーの大修道院長のイマーシュが、ギョームの独特な風貌と思想をおおい隠してしまったことも事実である。

しかし、彼の死後三〇年ほどたって書かれた『サン・ティエリのギョーム伝』が、二〇世紀の初頭に発見されたことがきっかけとなって、本格的な研究が始まり、彼の生涯と靈性がしだいに明らかになりつつあるが、わが国では彼にかんする研究はまだ緒に就いたばかりである。

そこでまず、このようによみがえったサン・ティエリのギョームの生涯を素描し、彼の靈性を生んだ時代の状況を考察する。彼の生涯にとって決定的な経験は、ベルナルとの出会いであった。病に倒れた二人がクレルヴォー修道院で、健康の回復を待ちながら靈的な対話をして、ともに『雅歌』を発見したことは、彼らの靈性だけではなく後世にも大きな影響を及ぼした。彼らは人と神との出会いに大きな関心を抱き、伝統的なラテン的修徳の雰囲気の中では見られなかった大胆さで、人と神との靈的一致を靈的結婚として描写している。その契機と動機は何にあったのか。二人はクリュニーの修道理想を批判し、また弁証論を聖書に適用するアベラールにたいしても手をたずさえて闘った。この対立はどのような歴史的意義をもっていたのか。長いあいだ彼の作品は、作者と思われていたベルナルのイマーシュをおして読まれてきたが、はたしてこの二人の友人の靈性神学は同じであったのか。第

I部では、これらの問題を中心に検討することによって、ギョームの靈性を歴史的に位置づけるとともに、彼の獨創性を明らかにする。

ギョームの死後半世紀たった一二世紀末に、南ネーデルラントのブラバント地方では、福音の純粹な理想を生きようとする「敬虔な女性たち」(mulieres religiosae)が現れる。彼女らは既存の社会的・宗教的な構造の中に、もはや自分たちにふさわしい場を見いだせず、新しい生き方を模索し始めていた。「敬虔な女性たち」はのちに日常語でベギン (beguines, beginen) と呼ばれ、やがて、教会と施療院、住居などからなる施設の総合体であるベギナージュ (beguinage, ベーインホフ beginhof) で共同生活を営むようになる。ベギン会という修道会は存在せず、したがって彼女らは公的誓願を立てた修道女ではなく、一般信徒である。彼女らは、社会的・宗教的な社団として機能するベギナージュに滞在するあいだは、貞潔を守り、指導者にしたがい、質素な生活をする。施しを受けながらも、彼女らは手仕事や病人の看護、葬送の手伝い、子供の初歩的な教育などをして、相互扶助の精神で自立した生活を送るよう努めていた。ベギンとなるに当たって財産を放棄する義務もなく、またベギンをやめて結婚することもできる、当時としては自由な生活形態であった。一二世紀から一三世紀への変わり目に自然発生的に始まったこのベギン運動は、中世における宗教的刷新の流れの中に位置づけられ、とくに女性の一般信徒の新しい宗教的参加の一つの表れとみなされている。女性史への関心が高まるにつれて、ベギン運動の研究も活発になり、今日、ヨーロッパ中世の女性にかんする研究書で、ベギンに触れない書物はないほどであるが、わが国では彼女らの靈性についてはほとんど知られていない。

なお、女性のベギンと同じ宗教的生活形態をとった男性をベガルド (begard, begard, beghard) と呼ぶ。ベギンより一世紀のちに出現したベガルドは、数もひじょうに少なく、また彼らの共同体はすぐに姿を消してしまい、ベ

ギンはど歴史的に重要な役割を演じていないので、ここでは触れない。

当初、ベギン運動はとくにネーデルラントとライン地方に結びつけて考えられていたが、近年の研究によってベギン運動はいしそれに対応する現象がフランス、スイス、イタリア等にもみられたことが分かっている。しかし、ベギンは全体として修道会を構成したり、一つの規則にしたがうことはなかったもので、それぞれの地域と時代によって、生活形態や規模、組織、社会的役割なども多様であり、一般化することはむずかしい。またベギン運動は、初めは固有の名称もなく星雲の状態が続いたのち、しだいに輪郭がはつきりしてくる。自然発生的な民衆の運動であるので、その起源を時間的・空間的にはつきりと特定することは困難であるが、少なくとも史料で確かめることのできる初期のベギンの一人ワニーのマリは、ブラバント——当時のリエージュ司教区の北西部を占め、西に隣接するカンブレ司教区の一部を含む——のニヴェルの出身であった。

南ネーデルラントにおける初期のベギン運動について、とくに都市との関係や人口動態学的観点からその社会的原因を探るとともに、ライン地方の運動と比較してこの地方特有の彼女らの生活形態を明らかにする。ヴィトリのジャックの『ワニーのマリ伝』は、生活をともにした者の直接的な証言であり、初期のベギンについて多くの貴重な情報を含んでいる。しかしこの一次史料は、中世の伝統的な「聖人伝」であり、教訓逸話の性格が強いことを考慮して、批判的に読み解く必要がある。そのためには、この敬虔な女性の伝記が誰のために書かれたかを吟味することによって、作者の意図とその社会的な意味を知ろうと努めなければならない。また女性史の観点から、男性である聖職者が書いた『ワニーのマリ伝』の中で、神秘的な女性マリの役割やベギンの宗教的経験が、どのように考えられているのかを検証することは、この運動の歴史的な性格の解明に役立つであろう。

使徒的生活と自発的清貧を志向する南ネーデルラントでは、ハデウェイヒ（一三世紀前半）が、既存の秩序にと

らわれないで、女性の宗教生活への参加の方法を模索する。彼女は公的誓願や規則ではなく、ベギンとして自由な選択によって敬虔な生活を送り、俗世の中で神との親密な個人的関係を求める冒険を試みた。ブラバントのベギンを代表する彼女は、ラテン語や聖書、典礼、神学の基礎知識をも備えていた。しかし、それまで知の唯一の受託者であった聖職者の領域に、ベギンが足を踏み入れることは、教会とのあいだに緊張を生み出していった。彼女は魂の内奥における霊的生活を、成熟し始めたネーデルラント語のブラバントの方言で生き生きと描写した。ハデウエイヒの『手紙』と『幻視』は、彼女の魂の内的経験を描き、また、『霊的叙情詩』は宮廷恋愛文学の技法を用いて、神を慕い、神との一致に憧れる魂の愛の冒険を繊細で優美に表現した。彼女は『手紙』の中で、サン＝ティエリのギヨームの『愛の本性と尊厳について』のかなり長い文をブラバントの方言に訳して引用しているので、彼の著作を読んでいたことが分かる。

ヤン・ヴァン・ルースブルク（一二九三—一三八一）は、ブリュッセルで四半世紀にわたって司祭職を務めたのち、近郊の「緑の谷」を意味するグルーネンダールに移り住み、やがてそこに修道院を設立して静かな生活を送った。彼の霊性は、この静けさの中での観想生活から生まれたのではなく、活気のある都市ブリュッセルの喧噪の中ではぐくまれ、彼はそこで司祭職を務めながら、霊的生活の頂点を経験していた。この事実は、彼が観想と活動の調和が取れた生活を理想としたことをも説明してくれる。

都市の住民は、自治特権を獲得したように、宗教的生活においても自由を主張するようになる。都市の人間のひしめきは、自由を制限したのではなく、自由の発明を促していた。自由はこの時代の中心の問題であった。都市の現象であるベギン運動には、「自由の息吹」が感じられ、一四世紀のゲルマン語圏で最も重要な民衆の宗教運動の一つであった自由心靈派も霊的自由を標榜していた。彼の著作からも、また母親がブリュッセルのベグナーージュに